



Title	力道山のライフ・ヒストリーにおけるプロレス受容に関する考察
Author(s)	岡田, 正
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/57725
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	おか だ ただし 岡 田 正
博士の専攻分野の名称	博 士（人間科学）
学 位 記 番 号	第 2 3 5 0 5 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 22 年 3 月 23 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 人間科学研究科人間科学専攻
学 位 論 文 名	力道山のライフ・ヒストリーにおけるプロレス受容に関する考察
論 文 審 査 委 員	（主査） 教 授 木前 利秋 （副査） 教 授 牟田 和恵 准教授 吉川 徹

論 文 内 容 の 要 旨

スポーツの歴史は暴力的要素を排除し、身体を拘束するルールが構築されていった過程である。しかるに、レスリングに粗野なイメージがつきまとうのは、乱暴な行為を観客の前で繰り広げるプロレスのせいかもしれない。観客はプロレスに暴力そのものを求めているのではなく、見せかけの暴力を求めている。レスリングがスポーツ化することによってまとう退屈さをプロレスは見せかけの暴力によって排除しようとしている。

この文脈で、ロラン・バルトはプロレスの人為性を愛好した。彼の“ Mythologies ”に収められた‘ Le monde où l’on cathe ’は反則に満ちた試合への偏愛が感じられる反面、反則の出ないスポーツライクな試合への嫌悪が提示されている。

アメリカやオーストラリアのスポーツ社会学におけるプロレス研究は、このスポーツが 20 世紀の初期の段階で、暴力に対する批判に答え、退屈さからの脱却を果たすために競技性を放棄し、「ドラマ」化していった歴史を明らかにしながら、1930 年代、50 年代、80 年代の隆盛の様子を描いている。そこでは善と悪が対決する道德劇が政治状況も反映しつつ展開されている。マイケル・R・ボールは 80 年代のプロレスがケーブルテレビの普及によって中産階級のファンを獲得しつつも、ライブの観客の多数は労働者階級であり、リングに登場するレスラーは彼らの心情、欲望を体現する存在とした。

これに対して、日本のプロレスは力道山があくまで「スポーツ」として提示しようとした路線が成功したためか、「ドラマ」と割り切って見る傾向は強くなかった。日本のプロレス研究においても、いまだにプロレスとは何なのかというテーマから完全に離れてはいない傾向が見られる。

本論文の根幹は力道山に関する評伝である。と同時に、プロレス論である。なぜなら、レスラー力道山は数多く語られてきたが、彼が日本の風土に植えつけたプロレスそのものはあまり取り上げられてこなかったからである。

力道山が朝鮮半島出身であることは常識となっているが、相撲入り直後から「長崎県出

身」というフィクショナルな生い立ちが作られていった。戦前は「日本人」たらんとした彼は敗戦後、駐留軍と親交を持ち、「アメリカ」に魅かれていく。朝鮮戦争勃発後、ひとりで行ったとされる断髪はアメリカ軍属が立ち会っての計画的行為だったようである。

プロレス入りを果たし、ハワイで修行をした彼はプロレスのテレビ中継を取り付ける。日本テレビ放送網の正力松太郎がプロレス中継にゴーサインを出したのは、プロレスがテレビ向きエンタテインメントとしてプロ野球と競合しないジャンルだったからである。一般紙では毎日新聞が紙上後援をすることになり、読売や朝日と対応が分かれた。

力道山の興行は日本にプロレス・ブームを巻き起こした。国民の敗戦コンプレックスがあったからこそその成功とよくいわれるが、それではなぜ力道山だけがヒーローになったのか。「敗戦コンプレックス説」にはプロレスというジャンルの特性や力道山のレスラーとしての技量への評価が欠落している。プロレスの本質を力道山は「真に迫った八百長」と表現している。観客はプロレスをスポーツとショーが混在したジャンルとして受容した。

力道山対木村政彦戦は、「真剣勝負」を売り物にし、なおかつ力道山が約束を破って木村に一方的にリアルな攻撃を加えた特異な試合だった。朝日新聞はアマスポーツ界の大部の論評を載せ、プロレスは「真に洗練された知性を根底として、闘争本能を十分満足させるような興行物」になっていないと断罪した。

1955 年 7 月がブームの頂点だったと考えられる。力道山のパトロンだった新田新作は言うことを聞かなくなった力道山を制御するために元横綱東富士をプロレスに転向させた。しかし、東富士はレスラーとしてのセンスに欠けていた。ただ力道山のラフファイトのエスカレートぶりに朝日新聞はプロレス訣別宣言を発した。ブームの高まりは子供たちの間でのプロレス遊びによる死亡事故からも推し量れる。

1956 年から 1957 年前半にかけての人気低迷期に、力道山は関西の群小団体を制圧し、業界を統一した。57 年 6 月に日本テレビが初の定期番組「ファイトメンアワー」を三菱電機の提供で流し始めたが、力道山は出演しなかった。

57 年 10 月のルー・テーズ戦は大物興行師、永田貞雄が手がけた最後の興行であり、それ以降は日本テレビと組んだ力道山の独壇場になっていく。つまり、プロレスの主導権は興行師からテレビに移行していったのである。紙上後援してきた毎日新聞はプロレスを扱う頻度が落ちていき、報道の中心は系列のスポーツニッポンに移行していく。58 年 8 月から始まった日本テレビ系列での金曜八時枠の隔週放送において、力道山は初めて毎週見ることが出来る存在となり、高視聴率をマークした。59 年 5 月から始まった「ワールドリーグ戦」でプロレスは興行的にも息を吹き返したものの、リング上は非スポーツ的な演出が強くなり、知的な空気が躍動していた 60 年代初頭の世情とはかけ離れていた。

スポーツ多目的ビルであるリキ・スポーツパレスを完成させた力道山は実業家としても注目を集めたが、リング上はマンネリ気味だった。一般紙が久しぶりにプロレスを取り上げたのが 62 年の「老人ショック死事件」だった。吉見俊哉は、55 年当時のプロレス遊びによる死亡事故が起こっても力道山の英雄像は揺るがなかったが、「老人ショック死事件」ではプロレスに対するバッシングが起こった点を指摘し、力道山評価の劇的転換が起こったとしている。街頭テレビの時代からテレビが家庭に普及した時代へとテレビ環境の変化がプロレスの社会的位置づけを変えたとの議論である。しかるに実業家やスターとしての評価はむしろ上昇していた点など検討課題は多いと考えられる。

力道山は婚約を発表した翌日に韓国を極秘訪問した。朝鮮半島出身の彼に民団、朝鮮総

連双方が接近を試みていた。もっとも力道山と北朝鮮との関わりに関してはもっと情報を精査しなければいけない。ケネディ大統領が暗殺されてからほどなく力道山は暴力団員に刺されたことが原因で死亡した。彼の死にまつわる一連の伝説的な話は「プロレス」という文化が社会においてどのように見られているかを表す証左である。

力道山死後もしばらく続いたプロレスの隆盛を見ると、彼が導入した「真に迫った八百長」という基本軸は日本人に向いていたというべきかもしれない。プロレスはとりあえず「スポーツ」として受容され、また観客と階層性の相関もアメリカのように明確ではない。「真に迫った八百長」が軸だったために、「格闘技」への接近という傾向も可能になったのである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、プロレスラーとして知られる力道山のライフヒストリーにかんする大部で詳細な論述を主な柱にしながら、日本におけるプロレスの位置づけについてスポーツ社会学的な考察を加えたものである。本論文がすぐれている点は、第一に、第2章から第11章にわたって、力道山の詳細で正確なライフヒストリーの記述を試みていることである。同部分での論述からは、申請者がさまざまな資料を渉猟した跡がうかがえる。そこで筆者は、公刊された力道山にかんする評伝の大方を追跡し、必要に応じてその内容に的確なコメントを付しているのみならず、力道山の周辺にかかわる人物・組織・集団や事件・社会現象などについても目を配り、力道山が生きた時代の社会的な風潮や時代的な雰囲気を生き生きと描き出している。資料追跡でとりわけ際立つのは、朝日・毎日・読売の三大紙に掲載されたプロレス記事に文字どおりすべて眼を通し、三紙でのプロレスにたいする扱い方の違いとその変化について考察した点で、著者による丁寧な資料発掘と実地検分の確かさを伝えて余りある（なおプロレス記事については、三大紙にかぎられず、スポーツ新聞とプロレスとの関連などについても興味深い分析が見受けられる）。ライフヒストリーにかんする記述部分は、もともと『力道山』（ミネルヴァ書房）として公刊されたものをもとにして、より学術的な考察に向けた書き足しと書き直しによってなったものである。同書は、学術的な評伝としても、朝日新聞などを始めにして複数の紙面の書評で取り上げられ、すでに社会的に高い評価を得ている。

しかし本論考の評価すべき第二の点は、こうしたライフヒストリーにもとづく考察を、プロレス（それもとくに日本のプロレス）にかんするスポーツ社会学的な分析に架橋しようとしたところにある。筆者は第一章でプロレスにかんする欧米および日本の先行研究を整理し、プロレスリングという「見せかけ」の魅力にみちた世界の分析を試み、最終章で再度その分析に立ち返りながら、力道山が求めたプロレスのあり方を、「真に迫った八百長」という言葉でくくっている。プロレスについてはそもそも「八百長」であって本物のスポーツとは言えないと云われてきたが、筆者の分析は、そのスポーツともたんなるショーや興行ともいえない不思議な魅力を語った一言として印象深い。ただし筆者のこのスポーツ社会学的な考察は、率直に言えば、日本のプロレス研究というコンテキストでは、ようやく緒についたばかりとの印象の方も強い。申請者は社会人として職務につく傍ら、『力道山』を上梓した後、一年にわたってプロレスにかんする社会学的考察を深める努力をおこなってきたが、結果からみて、思った以上の成果があったかどうかにはやはり疑問が残る。ただおそらくこの領域ではまだ未開拓の研究分野も残されており、申請者の力量からして、今後の研究が大いに期待されるところである。